

---

**恋花 - 花宮稀書 -**

kuu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋花 - 花宮稀書 -

### 【Nコード】

N2324Z

### 【作者名】

kuu

### 【あらすじ】

花を愛でることが好きな天帝の姫君は、神仙界と人界のありとあらゆる花を宮城に集め、常に花が絶えることのない庭園を造った。

そんな伝説が語り継がれている里で育った少年が、怪異に巻き込まれた故郷と家族を救うために奔走する物語。（タイトルは「こ

いのはな - かきゅうきしょ - 」とお読み下さい）

玖藍国くわんこくの東端とうたん、李州霄郷りしゅうせうきょう。

緑深いこの郷さとには、九百年余りの昔より言い伝えられている一つの伝説がある。

建国の祖、飛竜帝ひりゅうていが一代にして周辺諸国を統合し、世界に誇る広大な王国を築くことができたのは、神の加護を受けていたからこそなし得た偉業だと伝説は謳うたう。

彼が天帝…神仙界を統べる帝と交わした約定やくじょうにより、霄郷の東方にそびえ立つ崇峻山すうしゅんざんは神の領域とされた。

その中では、飢えもなく、病いもなく、老いることもない。

地上のどんな苦しみも悲しみも存在しない、神と仙の世界に属する場所。

飛竜帝は天帝の姫君のための宮城みやぎを山頂さんていに建立した。

花を愛でることが好きな姫君は、神仙界と人界のありとあらゆる花を宮城に集め、常に花が絶えることのない庭園を造った……と伝えられている。

崇峻山を禁足地とする命は代々の国王に引き継がれ、今ではこの伝説の真偽を確かめる術すべはない。

ただ伝説だけがこの郷に語り続けられていた。

霄郷で生まれ育った者は、姫君の宮城を『花宮かきゆう』と呼び、誰もが一度は花宮への入城を夢みるという。



002 しあわせになりたい

空から銀糸をまくように、静かに雨が降り続く夜だった。

生き物の気配もなく、葉ずれの音すら聞こえない。

無音の闇に、雨が降る。

底冷えする寒さと静寂をたたえた森の中を、二つの影が行く。

暗闇の中を明かりも灯さず、人里を目指して進む。

その歩みには、足音や熱い息遣い……『生物』の気配が無かった。

ソレらは乱立する木々の間をすり抜け、まっすぐに目的地へと向かう。

二つの影はやがて森を抜け、小高い丘の上から里を見下ろす。

闇の中に小さな光が灯っていた。

人がいる、証。

あそこには生きている人間が、灯火の下にいる。

「……はじめましょう」

影のひとつが発した声に答えるかのように、金色の瞳が闇の中で輝く。

二つの影は丘の上から一気に里へ向かって駆け出した。

民家を襲い、適合する『贄』を奪い取ってゆく作業は、彼らにとっ  
ては至極慣れたものだった。

自らの気配を絶ち、音を消し、目的のみを果たす。  
ただ、それだけ。

どれだけの時間が過ぎたのか。

地の果てが白みはじめるのを目の端でとらえると、影…否、少女の  
カタチをした『生き物ではない何か』は殺戮の手をとめて空を眺め  
た。

「もうすぐ夜が、明ける」

ゆっくりと、今夜の収穫を数えてゆく。

「……これで、きゆうじゆう、きゆう。贄は全て手に入れた。あと  
必要なのは、あの花だけ。……あれを手に入れば、やっと、私の  
願いは叶う……」

しあわせになりたい、しあわせになりたい、しあわせになりたい。

あなたと、しあわせになりたい。

あなたと交わした約束を、無かったことになんてしない。

どんな犠牲を払っても、わたしは願いを叶える。

死が満ちた里の中に、甲高い笑い声が響いた。

その声を聞く生者は、誰もいない。

二つの影は来たときと同じように、音もたてずに夜と朝の狭間に消えていった。

003 幼馴染

李州霄郷の里、清蘭。

清蘭は四方をまるやかな山に囲まれた山間にある。

季節は春をむかえていた。

森は新緑に彩られ、光をうけて輝く。

「藍瑛、藍瑛つ。何処にいるの？」

少女の澄んだ声が森の中を風にのって走る。

その声には捜し求める相手が見つからないことへの苛立ちが含まれていた。

「藍瑛、何処なの？」

澄んだ声は静謐な森の奥の湖まで響く。

その声に反応した者は二人いた。

湖のほとりの大樹に背を預けて座っていた少年は、穏やかな眼差しを空に向け、少女の声を運んできた風が流れてきた方向を眺めた。

漱祥は読みかけの書物を閉じ、苔むした柔らかい地面から立ちあがると、水浴をしている友人に声をかける。

「藍瑛、聞こえたかい？ 怜琳れいりんの声だ。君を探してるみたいだよ」  
静かな湖水がゆらぎ、漱祥の声に答えて湖の水面からもう一人の少年が勢いよく顔をだす。

「ああ、俺にも聞こえた」

日焼けした顔に無邪気な笑みを浮かべ、藍瑛は漱祥に向かって手を振ってみせた。

藍瑛の笑顔は、漱祥を苦笑させる程屈託がない。

彼の水に濡れた黒髪は、ぴよんぴよん好き勝手な方向を向いている。青と紫を混ぜ合わせたような藍色あいいろの瞳は、光を受けてくるくると色彩を変えながら、少し不安げに漱祥を見上げた。

「なんかあいつの声、機嫌悪そうじゃなかったか？」

藍瑛の言葉に漱祥はうなづく。

「そうだね。藍瑛、身に覚えはないの？」

「ない。……ないはずだけど、ひよつとしたらあるのかもしれないな」

自信なさそうな表情で藍瑛は額にかかる濡れた髪をかき上げた。叱られる直前の子供のような落ち着きのない様子がおかしくて、漱祥は微笑む。

藍瑛と漱祥、そして怜琳は幼い頃からの友人だった。

幼馴染で気心もしているせいか、お互いに遠慮のない物言いをする。

怜琳は里の者達の輪から外れがちな二人の面倒を見るのは自分しかない…と思っっているらしく、最近は特に藍瑛に対し何かにつけてあれこれと世話を焼くようになっていた。

「二人で同じことしてても、怜琳に怒られるのはいつも俺だけなんだよな。お前、気がつくと思われ側からなだめ役に回ってるし」

藍瑛は悔しそうに呟く。

「そうかな？ だとしたら『年の功』ってことかもしれないな。ああ、『人徳』ともいうよね」

余裕の笑顔で平然と切り返され、藍瑛は返す言葉がなかった。

漱祥は三人の中では一番年長で学問に長けており、人当たりも要領もいい。

誰に対しても物腰が柔らかく、常に笑みを絶やすことはない。

藍瑛はひとつ年上の幼馴染の顔をじっと見つめる。

白皙はくせきの肌色素の薄い亜麻色の髪。

深く輝く碧色みどりいろの瞳には理知的な光を宿し、穏やかな笑顔で常に柔らかい雰囲気ふんいきをたたえている。

隙のない完璧な所作は、礼儀にうるさい古老ころうたちをも満足させ、老若男女問わず里の人気者だった。

藍瑛が漱祥の欠点を探して考えに浸っていると、また怜琳の声が聞こえてきた。

先程よりも近い。

間違いなく、何かを怒っている声だった。

藍瑛は必死に漱祥に頼みこむ。

「水の中に潜って隠れてるからさ、俺はここにはいないって怜琳に言っといってくれよ」

「悪いけど、断るよ。後で僕まで怜琳に怒られたくないからね」

藍瑛は漱祥がまるで神像であるかのように、手をあわせて拝んだ。

「漱祥、俺達友達だよな？ 頼む、このとおり」

「だめなものは、だめ」

漱祥はきっぱりと拒否する。

「藍瑛、早くそこから上がって、服を着たほうがいいと思うよ。でないよ……」

漱祥が言外に匂わせた可能性を悟ったのか、藍瑛はその言葉に素直に従った。

「そつだな。こんな姿を見られたら大変だ」

藍瑛は早朝の剣の稽古を日課けいことしている。

今日は漱祥を誘って、稽古の汗を流すために森の湖まで来ていた。

男同士ならどんな姿でも構わないが、女の子に対しては里のしきたりに従って気を使う必要があった。

藍瑛は大急ぎで湖の岸まで戻って水の中から這い上り、脱ぎちらかした上着を手取る。

その瞬間、藍瑛の背後に怜琳がいきなり現れた。

「見つけたわよ、藍瑛！」

004 探していた理由

「うわっ？」

藍瑛らんえいと怜琳れいりんは、お互い相手の姿を見て動きが止まる。

数瞬後、凄まじい悲鳴すすきが森全体に響きわたった。

「きゃああああー！」

大音量の悲鳴に、藍瑛は思わず耳を押さえる。

「藍瑛の馬鹿！ どうしてそんな格好してるのよっ」

怜琳の罵倒ののちの言葉が追い討ちをかけるように藍瑛へと投げつけられ、騒々しい足音が続く。

しばらくすると、森はもとの静寂せいじやくを取り戻した。どうやら怜琳は里へ引き返して行ったらしい。

藍瑛はおそろおそろ耳から手を離し、ゆっくりと立ちあがる。頭の中ではまだ怜琳の悲鳴がこだまして、ひどい頭痛がしていた。

「耳、壊れるかと思った」

「確かに。僕もまだ耳が痛いよ」

漱祥は藍瑛の隣に歩み寄り、感嘆したように言った。

「さすがに女の子が集まるとすごい悲鳴だね」

ぼとり。

気をとりなおして、とりあえず服を着ようとしていた藍瑛の手から上着が落ちた。

藍瑛は漱祥の顔を見ながら尋ねる。

「いま、お前、何て言った？」

「女の子たちの悲鳴はすごかった…と言ったけど？」

「女の子たち？ 怜琳のほかにも誰かいたのか？」

「怜琳の後ろに五人いたよ」

こともなげに漱祥は答える。

「みんな、藍瑛の姿を見てびっくりしたんだろうね。あの悲鳴にはこっちも驚かされたけど」

漱祥の声音には、明らかにこの事態を楽しんでいる節があった。だが、藍瑛にはそのことに気づく余裕がない。

清蘭の里では『異性の前では衣服を乱さず、肌を見せない』という昔からのしきたりがある。

複数の少女達に自分の乱れた格好を見られた（見せてしまった）事態に、藍瑛は言葉を失い愕然<sup>がくせん</sup>として立ち尽くした。

藍瑛の父親は、清蘭の里の里宰<sup>りさい</sup>の地位に就いている。

王都から里へと派遣された中央の官吏<sup>かんり</sup>の中では最上位<sup>くわい</sup>の位<sup>い</sup>にあり、里の執政を一手に担う。

里宰の仕事の一つに、里の者たちに国の様々な法を守る指導を行い、違反した者を罰する役目がある。

その里宰の息子が、里のしきたりを破ったと里の者たちに知られたら、どんな騒ぎが起こるのだろうか。

漱祥は真剣に事態を憂<sup>うれ</sup>いている藍瑛の様子に気がつくくと、肩を優しく叩いてなくさめた。

「藍瑛、落ち着いて。君は上着は脱いでいたけど、長襦袢<sup>ながじゅばん</sup>は脱いでいないし、下の衣服はそのままだ。丸裸だったわけじゃない。肌を見せたといつても、襦袢が濡れて肌が透けて見えていただけだし。……厳密に言えば確かに肌を見せないというしきたりには反してはたけれど、今回のことは一種の事故だ。彼女達に頼んで、今日のことは黙ってもらえばいい。大丈夫、大きな騒ぎにはならないよ」

「本当にそう思うか？」

「ああ」

漱祥の気遣うような言葉と眼差しが、いつもより温かく感じられた。

藍瑛は里のしきたりを破ったことに対する良心の痛みをなんとかなため、地面に落とした上着を拾う。

その時、近くに何か白いものが落ちているのに気がついた。

「なんだこれ？」

拾い上げてよく見ると、それは巻尺まきじゃくだった。

漱祥はひょいっと身を乗り出して、藍瑛の手の中の小さな巻尺を見る。  
やる。

「さつき、誰かが落としたものかもしれないね」

藍瑛の脳裏に、昨日怜琳と交わした約束が甦った。

『明日は藍瑛の衣装の採寸するから、朝一番で私の家に来てね。早くしないとお祭りに間に合わなくなっちゃうから、絶対に忘れないでよ』

「そうか、あいつ…祭りの衣装の採寸を今日やるって言ってたっけ。だから俺のこと探してたんだな」

「花祭りの衣装の採寸？ 藍瑛の祭りの衣装の採寸を、怜琳が？」

漱祥は目を丸くして尋ねた。

「ああ。今年は叔母さんじゃなくて、怜琳が俺と親父の分を作って

くれるんだってさ。あいつ料理はうまいけど、裁縫はへたくそだから、この機会にみっちり修行させられる…って話だぜ。一体どんな衣装ができあがることやら」

藍瑛は従妹の顔を思い浮かべる。

白桃のようなふっくらした肌に空色の瞳、金色の美しい髪を長く伸ばし、毛先は柔らかく巻いている。

身内の欲目であることを差し引いても、なかなかの美少女だと思う。

怜琳は学業と料理洗濯…と、大抵のことなら何でもそつなくこなせるのだが、裁縫だけは上達の兆しがまったくないことを、幼馴染である二人はよく知っていた。

「雑巾でさえまとにも縫えない怜琳に、祭事の礼服を作らせるなんて…大胆というか、無謀というか。本当に大丈夫なのかな」

漱祥の言葉に藍瑛は笑って答えた。

「ま、俺としては祭り自体に興味ないから、どんなに変なものでも構わないけど、親父は本気で衣装の出来上がりを心配してたな。」「里宰が神事でもある祭りに不出来な衣装を着ていくわけにはいかないが、怜琳の作ってくれた衣装ものを無下むげにもできない」とか言ってさ」

何事にも動じない父親が、今回の件では珍しくうろたえている。

藍瑛にはそれが可笑しかった。

可愛い姪の心を傷つけることになったら…と、悩んでいる父親の姿を思い出して笑っていたが、漱祥の静かな声で我に返る。

「 藍瑛、君はまた皆の嫉妬しつとの的まとにされるね」

「嫉妬？」

藍瑛は首を傾げた。

まったく理解できないといった藍瑛の様子を見て、漱祥は苦笑いを浮かべて言った。

「僕達はまだ大人じゃない。だけど……子供でもないってことだよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2324z/>

---

恋花 - 花宮稀書 -

2012年1月1日01時47分発行